
支え

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

支え

【Nコード】

N3446A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

第二次世界大戦の頃の舞鶴。そこで病に臥せる一人の女性。その許婚である軍医と彼女の女中はそんな彼女を気遣うが。舞鶴を舞台にした歴史と恋愛のお話です。

第一章

支え

これは我が国がまだ古い世界にいた頃の話である。その頃日本は戦争に明け暮れていた。

『進め一億火の玉だ』

『欲しがりません勝つまでは』

『八紘一宇』

『警沢は敵だ』

『鬼畜米英』

そんな言葉が巷に溢れていた。そうした時代であった。暗いと言えば暗い、そして一部の者にとっては誰かを糾弾する為の種になっている時代である。過去は変えられない。それを利用して他者を貶め、自らを高みに置こうとする。人間として卑しい行動の一つだ。

だがその時代に生きていた人達にとっては違う。彼等はその時代しか知らない。その時代の正義に従って生きている。それを批判する権利は誰にもない。批判するとすれば卑しい愚か者だけである。そうした輩はいずれ自分達が裁かれる。後の価値観により一方的に因果応報は世の摂理である。

その時代にしかないものがある。その時代にはないものもまたある。それにより不幸になる者がいる。これはこうした話である。

「ゴホツ……、ゴホツ……」

舞鶴のとある屋敷の奥の部屋から咳き込む声がある。何やら苦しそうな声だ。

「また、また血が……」

白く細い、透き通る様な美しい手が紅に染まる。染まっているのは手だけではなかった。口も、そして白い着物も、布団もまた紅に染まっていた。まるで雪の中の牡丹の様に。

「もう終わるのかしら、わたし」

支え

少女は己の血に染まつた手を見て力なく呟いた。黒く、絹の様な光沢を持つ長く美しい髪も、琥珀の様な黒く大きな瞳も生気がなかった。整った人形の様な顔は血に半分汚れている。死の恐怖に怯えた顔であつた。

少女は側に置かれていた布で手を拭つた。血は消えたがその匂いはこびりついている。それはまるで死を知らせるようであつた。

死、それは今の彼女を支配するものであつた。この時は戦争が全てを支配していたが彼女は死に支配されていたのだ。

だがそれでも生きていた。そして生きたかつた、何としても。それには理由があつた。

「お嬢様」

障子の向こうに影が見えた。女中の影であつた。

「何？」

血で汚れた服を着替えながら彼女は尋ねた。

「藤崎様がお目見えですが」

「藤崎様が」

舞鶴にて勤務している若い海軍の軍医である。彼女とはとある縁で知り合つたのだ。

「如何なされますか」

「お通しして」

彼女はそう答えた。

「こちらにね。いいかしら」

「わかりました」

女中はそれに頷いたようである。影が動いた。そして彼女はすつと姿を消したのであつた。

「忠行様」

彼女はその軍医の名を呟いた。その声にはいとおしさが感じられた。暫くして一人の軍服を着た男の影が先程のものとされる女中の影に連れられてやって来た。彼女はそれを見てうつつすらと微笑んだ。

「こちらです」

「はい」

小柄な女中に連れられて背の高いスラリとした外見の青年が入って来た。

青い冬の軍服を身に纏い腰からは短剣を下げている。帽子は白である。その凛々しい服を着る若者もまた颯爽としていた。

細い涼しげな顔立ちに切れ長の黒い瞳を持っている。そして小さく引き締まった唇を持っている。美男子と言ってよかった。

「お久し振りです、潤子さん」

「忠行様」

彼女、潤子はその若い軍医である忠行に名を呼ばれ顔を動かした。そして彼を見上げた。

「御会いしたいと思っていました」

「私もです」

忠行はそれに頷いた。優しい微笑みも浮かべていた。

「申し訳ありません、私のせいで」

潤子はここで忠行に対して謝罪した。

「何故謝られるのです？」

「私がこのような身体でなければ。貴方にも御迷惑はおわけしなかつたのに」

「それは違います」

だが忠行はそれを否定した。

「私がこうして医学の道に入ったのは」

「はい」

「貴女をお救いする為でもあるのです。御国に尽くすと共に」

「私も」

「はい。私にとっては御国と貴女は同じものです。貴女がなくても御国がなくても私は生きてはいけない」

彼は静かな声でそう語った。

「貴女も御国もお救いしたい、私はそう願う軍医となりました」

「けれど私は」

潤子は悲しい顔をして顔を伏せた。

「胸の病で。こればかりは」

結核であった。この当時においてもなお不治の病であった。結核になれば人から離れさせられ、一人寂しく死んでいくのが宿命であった。彼女もそうであった。

「もうどうしようも」

「いえ」

忠行は首を横に振った。

「治らない病なぞこの世にはありません。それは私が保障します」

「貴方が」

「はい。私は医者だからわかるのです。潤子さん、貴女はなおります」

「だといいですけれど」

それを聞いても力なく笑みを返すことしかできなかった。

「血を吐くようになってもう一年、長くは」

「いえ、これからです」

それでも彼は言った。

「貴女は死にません、絶対に」

「絶対に」

「はい。医者である私の言葉を信じて下さい。潤子さん」

彼女の名をまた呼んだ。

「貴女は私が助けます。何としても」

「………はい」

潤子はそれを聞いて頷いた。

「それでは宜しく願います」

「わかりました」

支え

忠行も頷いた。そして二人はじっと見詰め合った。障子の向こうでは何かがしんと降りはじめていた。雪であった。舞鶴は雪が多い。今もまた降りはじめていたのだ。

二人はこのことをよく知っていた。潤子も忠行もこの生まれである。二人はかつてこの雪の降る庭でよく遊んだものであった。

潤子はこの村の庄屋の一人娘であった。江戸時代は名字帯刀も許された由緒ある家柄だという。忠行は士族の家に生まれた。二人は幼い頃にそれぞれの両親により許嫁とされていたのである。潤子が跡取り娘であり忠行が次男坊である為であった。だが二人はその頃はまだそれを知らなかった。

知るようになったのは尋常学校に上がってかなり経ってからであった。二人はそれを聞いた時互いに不思議に思ったものであった。

「なあ潤子」

「なに？」

忠行に声をかけられた潤子は手毬を動かすのを止めて彼に尋ねた。

「俺は御前の旦那さんになるらしいぞ」

「わたしが忠行さんの？」

「ああ」

彼はよくわからないまま答えた。潤子はそれを聞いて首を傾げた。

「じゃあわたし忠行さんの奥さんになるの？」

「そうらしいな」

「それで子供ができるの？」

「それは知らない」

忠行も首を傾げて答えた。その時右手に持っていた棒も忠行が首を傾げた方に傾いた。

「けれど俺と御前は夫婦になる決まりらしいな」

「そうなんだ」

「だから潤子」

忠行はここで急に真剣な顔になった。その時の顔のことを潤子は今でも覚えている。

「御前は何かあっても俺が守るな」

「守ってくれるの？」

「ああ」

忠行は答えた。

「俺は侍の家にいるしな。それに妻を守るのが夫の務めだ」

「それが忠行さんの仕事になるのね」

「そうだ。だから御前は俺が絶対を守る。いいな」

「うん」

若い潤子はそれに頷いた。もう気が遠くなる程の昔のことである。それから忠行は中学校に入りそこから海軍に入った。頭のいい彼は軍医になったのである。

時が来れば潤子が妻になる筈であった。しかしその直前のことであつた。

潤子が胸の病を患つたのである。結核であつた。婚礼は中止となつた。潤子は今いるこの奥の間に一人で置かれるようになった。そして部屋に入つて来るのは女中と舞鶴に赴任することとなつた忠行だけであつた。彼がここに赴任になつたのは話を聞いた海軍の上の方の情であるとも言われていた。

「外はどうなっていますか？」

潤子は忠行に尋ねた。

「外ですか」

「はい。戦の方は」

「皇国に敗北はありません」

彼は強い声でそう答えた。

「それは安心して下さい」

「はい」

「この雪が溶けて夏の日差しが入り込むようになった時には戦争は終わるでしょう」

「そうですね」

もう何年も続いている戦争である。そう簡単に終わるとは潤子には思えなかつた。一人床についていてもそれだけはわかつていた。

「戦争が終われば私は貴女の側に参ります。今以上に」

「そしてどうなさるのですか」

「貴女の病を完全に治して御覧に入れます。それが私の役目ですから」

「お願いできますか？」

「はい」

やはり強い声であった。

「必ずや。やり遂げてみせます」

「有り難うございます」

潤子はその気持ちだけで嬉しかった。病を得てから一人寂しくここで伏せるだけの日々を送る彼女にとって忠行のこうした来訪と言葉は何よりも有り難かったのである。その有り難さを忘れたことはなかった。

「藤崎様」

ここで女中が障子を開いて中に入って来た。

「何か」

「軍の方が御呼びです」

「軍から」

「はい。何やら急の用事らしいですが。至急お戻り下さいとのことです」

「わかった、すぐに戻ろう」

彼はそう言つと女中を下がらせた。そして潤子に顔を戻した。

「潤子さん」

「はい」

「また来ます。それまでお元気で」

「ええ」

忠行はその部屋から去つた。潤子はまた一人になった。

いなくなると急に寂しさが募る。それに耐えかねたのか障子の向こうに控える女中に尋ねた。

「ねえ」

「はい」

「今外はどうなっているのかしら」

支え

「御国のことでしょうか」

「ええ」

潤子は頷いた。

「戦争はどうなっているのかしら」

「夏にサイパンが陥ちましたね」

「ええ」

夏のことであつた。それで日本にも爆撃機が来るようになった。

この舞鶴も夜は暗くなった。空襲はないようだがそれで暗くなった。

「それから皆さんお忙しいようですね」

「忠行様も」

「ええ。ですからお戻りになられたのだと思います」

「でしょうね。こんなご時勢ですもの。軍人さんは大変ね」

力ない声でそう言った。

「忠行様も。本当に」

「お嬢様」

「御免なさいね、こんな話をして」

「いえ、いいです」

女中は優しい声でそれに返した。

「一番お辛いのはお嬢様ですから」

「私は別に」

彼女はそれを否定しようとした。だが女中はそれより前に言った。

「もうすぐ夜になります。お休みになられてはどうでしょうか」

「もう」

「はい、今日は寒うございますから」

「そうね」

障子の向こうに見える雪の数が次第に増えていく。そしてそれは

辺りを覆わんばかりであつた。

「けれど少し待ってってくれるかしら」

「何故でしょうか」

「今はね。もう少し味わっていたいの。忠行様と御会いできた喜び

を

「喜びを、ですか」

「ええ。久しぶりに御会いできたのだし」

「お嬢様」

「だからね。もう少しだけ。いいかしら」

「わかりました。それでは」

「有り難う」

女中は障子の向こうから姿を消した。見える影はただ雪のそれだけとなった。

潤子はそれをただ眺めていた。そしてそこに忠行のことを重ねて考えに耽っていた。

雪はそんな潤子の想いなぞ知る由もなく降っていた。彼女はそれを見ながら忠行のことを想っていた。暫くして女中が戻ってきた。

「お嬢様、もう」

「わかったわ」

今度は素直に頷いた。そして床の中に横たわった。

「お休みなさい」

「はい」

こうして彼女は眠りに入った。この世界とは別のもう一つの世界である。その世界では彼女は病を得てはいない。だが忠行はいる。その世界で遊びながら一人笑みを浮かべるのであった。

第二章

戦争は続いていた。舞鶴の冬は長い。だがその冬が何度過ぎてもこの戦争は終わらない。潤子は障子の向こうに思いを馳せながら女中に尋ねた。

「ねえ」

「何でしょうか」

女中は障子の向こうから声を返してきた。

「外はどうなっているかしら」

「相変わらずです」

「雪も？」

「はい」

女中が答えた。

「今は降り積もっています」

「そうなの。やっぱり」

彼女はそれを聞いて頷いた。それも当然だと思った。

今日はいつもより冷えるからだ。そうした時は外の世界が銀色になっっている時だ。幼い頃からのことでそれはよくわかっていることであつた。

「ねえ」

「はい」

女中はまた応えた。

「外を見てみたいのだけれど」

「けれどそれは」

「少しだけね。いいでしょうか？」

潤子はそう頼み込んだ。

「今日は気分がいいから。それに外を見ると気が晴れるし」

「少しだけですよ」

女中は仕方がないといったふうに答えた。

支え

「本当に」

「御免なさいね」

女中はすうつと障子を開けた。そして潤子に外を見せた。木々も土も完全に白く化粧されていた。

「まあ」

潤子はそれを見てうつすらと微笑んだ。

「まるで白粉で染めたみたい」

「白粉ですか」

「私にはそう見えるわ」

優しげに笑ってそう言う。

「そう思わないかしら」

「確かに白いですけれど」

女中は苦笑しながら言う。

「白粉はちよつと言い過ぎじゃないでしょうか」

「そうかしら」

潤子はそう言われて首を傾げた。

「私はそう思うのだけれど」

「綺麗ですけど冷たいですよ」

「わかってるわ。けど」

潤子は言った。

「その冷たさがいいのよ」

「そうなのですか」

「いつもこんな暗い部屋に閉じ込められているし。こつした白い世界を見るのもいいわ」

彼女の声が次第に明るくなっていく。

「気が晴れるし」

「それなら外に出られてみればどうでしょうっか」

「いいの？」

それを聞いて驚きの声をあげた。

「けど」

支え

「いいんですよ。病は気からともいいますし」
女中は言った。

「けれどさつきは」

「考えが変わりました。それでは駄目でしょうか」

「いえ」

それを聞いて思わず苦笑してしまった。

「それならいいけれど」

「ではこちらにおいで下さい」

「ええ」

潤子は部屋に入って来た女中に手を引かれ庭に出た。そして草履を履いて雪を踏んだ。しゃり、という小さな音がその耳に入った。

庭だけでなく見渡す限り白い世界であった。吐く息まで白い。

「本当に雪ばかりね」

「如何ですか」

女中は何故か自分がそうしたわけでもないのに自慢そうに潤子に尋ねてきた。

「お気に召されましたか」

「ええとても」

潤子は静かな声でそれに頷いた。

「見ているだけで何か気が晴れるわ」

「それはよかったです」

そう言いながら屈んで雪を少し手に取った。それを潤子に差し出す。

「何が見えますか」

「何か小さな宝石が」

彼女は雪の結晶を見てそう言った。

「眩しいわね。何か」

「けれど綺麗ですよね」

「そうね」

それに頷いた。

「何かこれを見ていると気が晴れてきたわ」
「左様ですか」

「ええ。これで忠行様もおられたらいいのだれど」

「それは流石に贅沢でしょう」

女中はそれを聞いて苦笑した。

「幾ら何でもそれは」

「そうね」

潤子もそれを聞いて苦笑した。

「これで満足よ。じゃあ」

「はい」

女中に案内され部屋に入ろうとする。だが部屋に入ったところで一人の青年が姿を現わした。その彼であった。

「忠行様」

「暇ができましたので」

彼は微笑んで彼女にそう答えた。

「暇が」

「はい」

「どういうことですか？」

「今までは駆逐艦に乗っていましたがこちらの基地司令部の配属となりました」

「司令部の」

「はい、軍医として。それでこちらに報告に来ました」

「そうだったのですか」

「これで今までよりこちらに来れる機会が増えると思いますが」

「それは何よりです」

潤子はそれを聞いて素直に微笑んだ。

「では機会がありましたら是非」

「はい」

忠行もそれに頷いた。

「宜しければ」

支え

「ええ」

何処かぎこちなかった。戦争と病気が二人をそうさせていた。それがなければこれよりもっと普通の婚約者同士としての付き合いが可能であつたろうに。女中はそれを思うと不憫でならなかった。

それから忠行は今までも増して潤子のところに顔を出すようになった。それに伴い潤子の病状も少しましになっていた。心が晴れやかになると病もよくなるということであろうか。

白い冬が過ぎ桜の春となった。それはすぐに過ぎ去り紫陽花の花が咲く梅雨となった。

この時機舞鶴はとかく雨に悩まされる。舞鶴の雨の多さは有名であり潤子もそれは子供の頃から肌で感じ取っていた。

「生憎の雨ですね」

「ええ」

障子の向こうから話し掛ける女中に頷いた。部屋の中にも雨の音が聴こえてくる。

「本当に舞鶴は。雨が多くて」

「その雨もね。慣れると愛しいものよ」

しかし潤子は雨でも機嫌は悪くはなかった。

「この雨はね、不思議なのよ」

「何故でしょうか」

「いつも降っていると思うでしょ。けれどそうじゃないの」

「そうですしょうか」

女中もまた舞鶴に生まれていた。だからこの雨のことは知っている。彼女の知る舞鶴の雨は何時でも降っている忌まわしい雨であった。雨は結核にも悪い。そうした意味でも忌まわしかった。

「時々晴れるのよ」

「はい」

それは彼女も知っていた。

「その時に限ってね。いいことがあるのよ」

「そうでしょうか」

少なくとも舞鶴の多くの者はそうは思っていない。特に軍人達は舞鶴つてのは都合の悪い時だけ雨が降るな」

それが彼等の感想であった。舞鶴というのは雨が多いがそれは何故が重要な行事等の時に降るのである。そして降って欲しい時には降らないのだ。軍人達はそう言つて舞鶴の雨を嫌っているのだ。

「それにな、雨になるとあれが出るんだ」

彼等はここで忌まわしげに言葉を濁すのである。

「あれって？」

それをよく知らない者が尋ねる。すると彼等はある岸辺を指差すのだ。

「あそこにな」

「はい」

「雨の降る夜になると出て来るんだよ、あれが」

「そのあれって何なんですか？」

「これだよ」

彼等はここでそう言つて両手をだらんと垂らして幽霊の真似をする。

「これが出るんだよ」

「まさか」

「じゃあ行つてみな」

それを否定すると彼等の態度は冷たい。

「手旗振つてる子供がいるからよ」

「感心な子供ですね」

「そう思うか？」

軍人達にとつては感心な筈だ。夜中まで手旗を練習する子供なぞ本来は将来が頼もしいと思う筈だ。だが彼等はそれに対して表情を曇らせるのである。

「十年以上同じ子供なのか？」

「えっ!？」

支え

それを聞いて殆どの者は顔を強張らせる。

「あの、それは」

「わかるだろ。雨の降る夜になると何故かよく出るんだ」
彼等の顔がさらに暗くなる。

「だから嫌なんだよ、雨つてやつは」

「そうですか」

「ここのはな。ここの雨は特別だ」

その子供は何時からいるか誰も知らない。気が着いた時にはもういたという。何者なのか誰も知らない。調べようとする者もない。調べたら何があるかわからないからである。

不気味なものも含む舞鶴の雨である。だがそれでも潤子はこの雨が好きだった。女中はそれについて尋ねたくなかった。だがそれより前に潤子の方から声をかけてきた。

「知りたい？」

「は、はい」

女中は戸惑いながらも答えた。

「私がここの雨を好きな理由はね」

「はい」

「雨が止むとね。何故かよく忠行様が来てくれるから。何故かわからないのだけれど」

「そうなのですか」

忠行が晴れ男ということであろうか。

「いつもね、そうなの。どれだけ降っていても忠行様が来られる時は止むの」

「はあ」

「今でもそうよ。多分雨が止むとね」

「あら」

ここで急に雨の音が止んだ。不思議なことに。

「止みましたね」

「来られるかも」

潤子はそれを確認して微笑んだ。

「忠行様が」

「まさか」

「来ないと思うの？」

「それは」

どうでしょうか、と言おうと思った。だがそれより先に本屋敷の方から声がした。

「お嬢様」

「忠行様よ」

潤子はそれを聞いて微笑んだ。

「悪いけれど。迎えに行つて」

「はあ」

半信半疑のまま頷いた。そして屋敷の方に向かった。すると潤子の言つ通りであつた。

「お邪魔します」

「あら」

忠行を見て思わず声をあげてしまった。実に不思議な舞鶴の雨であつた。

不思議な梅雨も去つた。そして夏になった。ある日突然サイレンが鳴つた。

「空襲!？」

「お嬢様」

女中が血相を変えて部屋に入つて来た。

「こちらへ」

「え、ええ」

庭の端にある防空壕に案内された。そして女中と二人でその中に入った。

サイレンは遠くから聴こえてくる。潤子はそれを聞いて呟いた。

「街の方ね」

「港がありますからね」

支え

女中はそれに答えた。

「あそこには船や倉庫が一杯ありますから」

「兵隊さんを狙っているのかしら」

潤子の顔が急に蒼ざめた。病の為白くなっている顔がさらに白くなつた。

「忠行様が」

「お嬢様」

それを受けて女中がキツとした顔で彼女に言った。

「何があつても御氣を確かに」

「ええ」

潤子はそれに頷いた。軍人の妻となる身なら何があつても受け入れなければならぬ。それがこの時代の考えであつた。それがこの時代の常識であつたのだ。

「いいですね」

「わかつたわ」

防空壕の中で頷いた。やがて大した数は来ていなかったのか空襲警報は解除された。二人はそれを受けて防空壕からゆっくりと出て来た。

「早いわね」

「偵察か何かだったのでしょうか」

二人はそんな話をしながら部屋から出た。

「それにしても何か変なのですが」

「変」

「ええ。今までにも何回か来ていたわね」

空襲は日本のあちこちで起こっていた。そして多くの者が犠牲になつていった。アメリカ軍は軍事施設も一般市民も攻撃の対象にしていったのだ。

「それが今回は。やけに早かつた気がするわ」

「そうですね」

女中はそれには懐疑的であつた。

「いつもと変わらない気がしますが」
「そうかしら」

何か嫌な予感がしていたのである。潤子はそれを受けてこう言っていたのだ。部屋に戻って暫くしてから青い顔をした男がやって来た。

「お嬢様はいるかい？」

「貴方は」

女中は彼のことを知っていた。長い間この家に仕えてきた老人である。歳で仕事を息子に譲ったのだ。その息子は今出征している。フィリピンか何処かにいるらしい。

「さつき街にいたんだけどな」

「街に」

女中もそれを聞いて嫌な予感がした。

「何かあったのですか？」

「さつき空襲があったな」

「ええ」

「それでな。軍の施設が爆撃を受けたんだ。わしが見たのは火を噴く建物だ」

「兵隊さん達は御無事でしたか？」

「いいや」

彼はそれを受けて首を横に振った。

「何人かは怪我しとった。ありゃ助からんかもな」

「そうなんですか」

「結構大勢怪我しとったぞ。海軍さんの人がようさん怪我しとった」

「海軍さんが」

「ああ」

女中はそれを聞いて顔色がいよいよ悪くなった。

「じゃあ」

「詳しいことはわからんがな。覚悟しとた方がいいかも知れん」

彼はそう言った。

「何かあるかわからんからな。ええな」

「はい」

女中はそれに頷いた。

「お嬢様にもそうお伝えしておきます」

「すまんのう。いい話じゃなくて」

「いえ」

だが女中はそれには首を横に振った。

「今はよくあることですから。それじゃあ」

「おう」

老人は屋敷を後にした。女中はそれを見送った後で屋敷の奥に向かった。そして潤子にこのことを話すのであった。

「そう、やっぱり」

潤子はそれを聞いても意外な程落ち着いていた。

「そんなことだろうと思っていたわ」

「宜しいのですか、お嬢様」

女中は冷静な潤子を見てかえって心配になってきた。

「忠行様のことは」

「覚悟はしているわ」

彼女はそう答えた。

「戦争ですもの。私も軍人の妻となる身だし」

「そうなのですか」

「ええ」

潤子はこくり、と頷いた。

「だからね、私のことは心配しないで」

「はい」

「私のことはいいから。わかったわね」

「わかりました」

支え
そう答えるしかなかった。彼女は潤子の思いも寄らぬ芯の強さに心を打たれたのであった。だが実はそうではなかった。このことはやはり潤子の心と身体を打ち据えていたのであった。

支え

第三章

彼女はこの時から身体を悪くしだした。それまで止まっていた喀血もまた起こるようになり床に伏す時間も長くなった。それがどうしてか女中にはよくわかっていた。

「お嬢様」

たまりかねて彼女は床に伏す潤子に声をかけた。

「何かしら」

障子を開けてきた女中に顔を向け声をかける。金色の日差しが見える。そしてそこからは蝉の鳴き声も聴こえる。もう夏であった。

「街に出てみませんか」

「どうしてかしら」

潤子はそれに尋ねた。

「気分転換にでも思いました」

「気分転換」

「はい。如何でしょうか」

外の蝉達はそれに応えたか声を一層大きくさせている。潤子はそれを聞きながら答えた。

「私はいいけれど」

「では行きましょう」

「けど、いいのかしら」

「何がですか？」

「こんな暑い日に。身体に悪いのではなくて？」

「冬にも言いましたね。病は気からと」

「ええ」

「たまにはこうした気晴らしも必要です。ですからどうですか？」

「けど」

だが潤子はあまり乗り気ではないようだ。あの空襲以来忠行は屋敷にやって来ない。彼女にとってそれも気懸りなことであったのだ。

「いいの？本当に」

「旦那様や奥様には私が申し上げておきますよ」
女中はこうまで言った。

「ですからね、まあ遊びに行くだけでも思つて」

「そんなに言うのなら」

「ここまで言われてようやく頷く気になった。

「行きましよう。宜しくね」

「はい」

こうして潤子は女中と二人で街に出た。もんぺに着替えて街を歩いた。

「あまり変わっていないわね」

彼女は病にかかつてから街には出てはいない。だがそれでも覚えている光景と今の街並はあまり変わつてはいなかった。それが嬉しくもあつた。

「ええ」

「けれど。船は減つたわね」

「こういう御時世ですから」

二人は港を見ながらそんな話をした。見れば軍艦も他の船もあまりない。今までは港を埋め尽くす程あつたというのに。これが戦争というものであつた。

「兵隊さんも。何だか慌しそうね」

「広島に大勢行かれてるようですし」

「広島に？」

「はい。あと長崎に。何でも新型爆弾が使われたとか」

「そうなの」

「街が消し飛んだらしいです。それで大勢の人が亡くなられたとか」

「広島が。大変なことね」

「そして満州にはソ連軍が雪崩れ込んできたそうです。それであち
らでも大変なことになっているとか」

「日本はどうなるのかしら」

「お嬢様」

それを聞いて険しい顔になった。

「それはあまり仰らない方が」

「そうね」

潤子はそれに頷いた。

「兵隊さん達が御気を悪くされるわね」

「ええ、まあ」

本当は違う意味なのだが頷いた。二人はそのまま海軍の施設の方を歩いていった。まだ空爆の跡が残っていた。

「あら」

ここで潤子はあるものに気付いた。

「赤煉瓦まで」

「はい」

壊れていた。空爆によるものであるのは言うまでもない。

赤煉瓦は舞鶴の市民にとっては誇りのようなものだ。海軍と共に生まれ、海軍と共に栄えてきた街だ。海軍は江田島の兵学校がとりわけ有名であるが赤煉瓦がトレードマークともなっていた。その赤煉瓦が崩れてしまっていることに潤子は悲しいものを感じると共に痛々しくなった。

「私小さい頃よくここに来たの覚えてるかしら」

「勿論ですよ」

女中もそれに応えた。

「よくお連れしましたから。暑い日でも寒い日でもここに来ましたね」

「ええ」

「あの頃のこととはよく覚えていきますよ。ほら、私が羊羹を買いましたよね」

「私と二人で食べた」

「はい」

海軍では羊羹がよく食べられた。あとラムネもである。海軍が誇

った巨大戦艦大和には羊羹やラムネを作る場所まであった程だ。その大和ももう沈んでしまっているが。

「あの羊羹は美味しかったわ」

「あら、アイスクリームの方がいいって駄々をこねていたのはどなたでしたから」

「昔のことなんで覚えていないわ」

「ずるいこと」

「うふふ」

話していると上機嫌になってきた。笑っていると気持ちまでよくなってくる。そしていい話も舞い込んでくるものだ。最初は悪くとも。

「うっ」

ここで潤子は突如として胸を押さえはじめた。

「お嬢様、まさか」

「ごほっ」

危惧した通りであった。潤子は咳き込みはじめた。

「ごほっ、ごほっ」

力のない咳が続く。咳き込むその整った顔に苦悶の色が浮かぶ。見るからに辛そうであった。

「大丈夫ですか」

「え、ええ」

だが手にしたハンカチに血があった。それ程多くはなかったが血を吐いたのは事実であった。

「今のはそれ程多くはないわね」

「けど」

「大丈夫よ。けれどこれ以上歩いたら貴女に迷惑がかかるわね」

「私は」

「いいのよ。戻りましょう」

「はい」

戻ろうとした。しかしそこで呼び止める者がいたのである。

「あの」
「何か」

二人は声がした方を振り向いた。するとそこに一人の白い海軍将校の軍服を着た男が立っていた。

「大丈夫でしょうか」

「え、ええまあ」

どうやら今血を吐いたところを見られたらしい。少し狼狽を覚えた。

「一応は。気分もよくなりましたし」

「しかし用心することが大事ですね。こちらに来られませんか」

「こちらにとは」

「病院ですよ。海軍の」

「病院ですか」

「薬もありますし。如何でしょうか」

「そうですね」

潤子はちらり、と考えを巡らせた。病院に行ったとなれば女中も怒られはしまい。それに薬をもらえれば少しは楽になる。そう考えると迷いはなかった。

「わかりました」

その申し出を受けることにした。それに病院ならば若しかすると忠行がいるかもしれない。そうした考えもあった。そして彼女は女中と共にその将校に案内され海軍の病院に入ったのであった。

海軍の病院だけはあった。かなり大きい。それに施設も町の病院とは比較にならないものであった。それを見て彼女は心に安心するものを覚えていたのであった。

「落ち着かれましたか」

「はい」

案内役を務めてくれるその軍人に答えた。

「病院というだけで。何か落ち着いてきましたか」

「それは何よりです」

軍人はそれを聞いて微笑んだ。

「私はここに勤務しているのですがね。そう言って頂けると嬉しいです」

「この病院にですか？」

「はい」

彼は答えた。

「軍医をしております。細木と申します」

「細木さん」

「はい。宜しくお願ひします。今こちらは何かと人手不足でして。至らない点多いと思ひますが」

「そういえば人が異様に少なかった。戦争のせいだとはいえ少し変な程少なかった。」

「広島や長崎で色々とありましてね。それであつちに人を送つているのですよ」

「そうだったのですか」

「あと東京にも。帝都は何度も激しい爆撃を受けておりましてね」

「そうらしいですね」

「それも聞いていた。今日本の至る街がアメリカの爆撃を受けていた。街という街が瓦礫の山と化していたのであつた。」

「そつちにも人を送つていまして。おかげでこうした状況だったのですよ」

「大変なんですね、本当に」

「それが戦争ですから」

細木はそう言つて苦笑した。

「けれど貴女御一人を何とかすることはできますから。私は結核については詳しいですから」

「よかつた」

女中はそれを聞いて顔を明るくさせた。

「地獄に仏とはこのことですね」

「まあ仏かどうかまでは言えませんがね」

苦笑を続けながらそれに答える。

「それでも医者 endpoint くれですから。薬を差し上げることにはできませんよ」

「有り難うございます」

「本当はね、もっといい薬も医者もいるのですが。生憎物も人も何も無い状況でして」

人については先程言われた。ものについては嫌という程わかっていた。とにかく何も無い時代だったのだから。

「せめて藤崎さんがおられればね。もっと楽ができるのに」

「藤崎!？」

潤子はその名前に反応した。

「え、ええ」

細木はいきなり言われたので少し戸惑いながらもそれに応えた。

「藤崎中尉ですが。御存知ですか」

「こちらの者なので。名前だけは」

「そういえば中尉は舞鶴の御出身でしたね」

「はい」

婚約しているということは隠した。そのうえで彼に応えたのだ。

「お知り合いだっただとは。中尉は今はこちらにはおられませんよ」

「そうなのですか」

それを聞いて安心した。今までどうなったか不安で仕方ないからだ。今生きているということだけわかればそれでよかった。しかしさらに突っ込んで尋ねた。

「それで今どちらに」

「東京です」

「東京、ですか」

それを聞いて嬉しいのか心配なのかわからなかった。広島や長崎ではないらしい。新型爆弾が何なのかはわからないがそれに遭ったわけではないらしい。しかし東京もかなり危ない。だから心配なのであった。

「先月からね。急に決まりました」

「そうなのですか」

だから姿を見せなかったのだ。手紙が来ないのは忙しいからであろうかと思つた。

「あちらで空襲に遭つた人達の救護にあたつておられます。昨日の電報がありました」

「電報が」

「ええ。御国のことをね。願つておられましたよ」

「そうですか」

生きている。そして元気なようだ。それを聞いてさらに安心した。

「またこちらに帰られると思います。お知り合いの方でしたらまたその時においで下さい」

「わかりました」

薬をもらつてその時は帰つた。帰り道潤子は上機嫌で微笑んでいた。

「よかつたですね」

「ええ」

女中の言葉にも頷いた。

「忠行様が御無事で」

「東京におられたなんて」

「また戻つて来られますよ。言うならば出張ですから」

「そうですね。けれど」

「けれど？」

「お手紙の一つ位いいでしょうに。送つて下さつても」

「軍人にはそれよりも大事なものがあるのですよ」

女中はそう言つて笑つた。

「それをお察し下さい」

「そうですね」

潤子も笑つた。そして二人はそのまま屋敷に帰るのであつた。幸い女中は怒られずに済んだ。運がよかつたしそれに潤子の機転がき

支え

いた。薬は女中をも救ったのであった。

第四章

それから数日が過ぎた。相変わらず暑いままであった。朝だといふのにもう蝉が鳴いている。病に苦しむ身体を苛むような暑さと声であった。

「おい潤子」

いつもは来ない、いや来られない筈の父がやって来た。厳しい顔をさらに厳しくさせていた。

「どうしたのですか、御父様」

彼女はその時布団の中で上体を起こしていた。そして女中と話をしていた。

「今日の昼、居間に来られるか」

「居間に」

病気になつてから行ったことはない。それを聞いて自分の屋敷だといふのに妙に懐かしい気分になった。思えば妙なことではあった。

「そうだ。母さんも一緒だ。来られるか」

「御母様も」

「そうだ。今身体は大丈夫か」

「ええ。居間へ行く位なら」

「そうか。では来なさい。正午だぞ」

「何かあったのですか？」

「陛下がわし等に対して何か仰るらしい」

「陛下が」

それを聞いて潤子も女中も驚きの声をあげた。言うまでもなく日本の主にして軍の最高司令官であった。そして同時に現人神であるとされていた。これもまた時代であった。

「そうだ。来られるようなら来い。そうでなければこっちにラジオを持って来てやろう」

「わかりました」

支え

そこまで言うのならば相当なことであつた。潤子は頷くしかなかつた。

父はそこまで言うと部屋を後にした。そして潤子と女中だけが残つた。

「陛下が私達に一体何でしょうか」

「さあ」

それは潤子にもわからなかつた。

「いよいよ最後の決戦を挑まれるのでしょうか、敵に」

「ソ連に対して」

ロシアの頃からその恐怖は拭われていなかった。特にこの舞鶴はロシアに向けられた港である。住んでいる者達もあの国の恐ろしさはよくわかつていた。それはまさに恐怖であつた。

「だとしたら私は」

潤子はここで暗い顔になつた。

「女子の身、そしてこの様な身体では陛下のお役には立てないわね。その時は」

「なりません」

女中はその言葉に首を横に振つた。

「お嬢様があちらに行かれるのにはまだ早うございます」

「けれど」

「まだ昼までには時間があります。それまで落ち着かれて下さい」

「ええ」

女中に静かにさせられた。そして二人はそのまま部屋で昼を迎えた。昼になると潤子によく似た外見の女性が部屋にやって来た。彼女の母である。

「行きましよう」

「はい」

支え

親だというのに久し振りに会つた気持ちである。病は親と子の縁まで遠いものにしてしまう。彼女はこの時それを心の中でふと感じた。しかしそれは口には出さなかつた。出すと悲しくなるのは自分

だけではなかったからだ。

居間には既に父がいた。そして使用人達も。皆居間に集まって正座していた。

「来たな」

「はい」

潤子と母、そして女中は頷いた。潤子は女中に付き添われて部屋の端に正座して座った。居間の壁にある時計を見ればもうすぐ正午であった。

正午になった。時計の音がそれを告げる。するとラジオから声が聞こえてきた。

「朕深く」

「これは」

「陛下のお声だ」

父が使用人の一人にそう答えた。

「謹んで御聞きするようにな」

「はい」

皆それを受けて完全に沈黙した。ラジオから聞こえる陛下の御声と部屋の外から聞こえる蝉の声以外は聞こえなくなった。いつもなら五月蠅く思える蝉の声も不思議な程静かに聞こえた。

「億兆の赤子を保し」

それを聞いて自分達のことだ、と思った。次第に何を仰っているのかわかった。

「諸盟邦に対し遺憾の意を表せざるを得ず」

「うう……」

それを聞いて誰かが泣く音が聞こえてきた。

「よせ」

父がそれを止めようとする。だがその父も泣いていた。あの厳しい父が泣いていた。

「泣くな」

「しかし」

支え

それを止める者まで泣いてはとうしようもなかった。

「難きを堪へ忍び難きを忍び」

「負けたんだ」

また誰かが言った。

「日本は戦争に負けたんだ」

「負けた」

潤子はそれを聞いてまずは自分の耳を疑った。日本が戦争に敗れるとは。

「連合軍に負けたんだ」

「言っな」

そう言っ父の声にはもう涙が滲んでいた。

「そんなことは言っな」

「しかし」

「言っなと言っているんだ」

もう涙が止まらなかった。

「終わったんだ、何もかも」

「戦争も。そして」

「日本も……」

「臣民其れ克く朕か意を體せよ」

それが最後の御言葉であった。こうして玉音放送は終わった。終わった時には何もかもが終わってしまっていた。

潤子はそれが終わった時には完全に放心状態になっていた。負けたということはわかったがそれが一体どうということなのか理解できなかった。不意に隣にいる女中に問うた。

「ねえ」

「何でしょうか」

見れば女中も同じであった。放心していた。

「これからどうなるのかしら」

「わかりません」

彼女もそう答えるしかなかった。

「どうなるのでしょうか、一体」

「わからないのね」

「申し訳ありません」

謝るその声にも心はなかった。

「じゃあいいわ。帰りましょう」

「けれど」

「いいのよ。もう何もかも終わったのだから」

目の前では男達も女達も泣いていた。涙が止まらない。それは潤子も女中も同じだった。

「そうでしょ」

「わかりました」

二人は流れる涙をそのままにして部屋に戻った。潤子は床に入ってからあらためて女中に声をかけた。

「忠行様はどうされるのかしら」

「わかりません」

本当に何もわからなかった。

「戻ってこられたらいいですが」

「戻ってこら」たらいいわね」

潤子はそれにそう答えた。

「そうでなければ。もう私は生きている意味がないもの」

「お嬢様」

普段ならここで強い声で諫める。しかしそれもできはしなかった。それができる状況ではなかったからだ。

「いえ、いいです」

「待ちましょう、今は」

「はい」

潤子の言葉に頷いた。

「待っていれば忠行様はきつと来られます」

「わかりました」

支え
今度は潤子に従うことにした。何はともあれ問題はこれからだと

思った。

どうなるか本当にわからない。不安が心を支配する。それと戦うことがまず始まりであるように思われた。

数日経った。まだ連絡はない。夏の暑さだけが増していくように思われた。

その中で潤子は一言も言わずただ床に伏していた。女中はそれを見守っていた。

時間だけが過ぎていく。忠行は帰ってはこない。潤子の身体は血を吐くこともなく穏やかな様子であったが病というものはその間にも進行していくものである。女中は気が気ではなかった。

九月になると連合軍が日本にやって来るという話になった。それを聞いて心はさらに不安なものになった。

「まさか日本を潰すつもりじゃ」

女中は次第に夜も寝られなくなってきた。どうなるのか怖くなってきた。不安で不安で眠れないのだ。

しかし潤子は落ち着いていた。女中にはそれが不思議なものに思えてきた。ふと言葉をかけられた。

「ねえ」

「何でしょうか」

見れば病を患っている潤子よりも顔色は悪くなっていた。潤子はその顔を見ながら声をかけてきた。

「気にかけてもどうにもならないわよ」

「そうでしょうか」

女中にはそうは思えなかった。

「このままでは私達は」

「私はね、待っているだけだから。だから落ち着いていられるのよ」

「忠行様をですか」

「ええ」

彼女は頷いた。

「貴女もね。待っているといいわよ」

「お嬢様には待てる方がおられますね」

「勿論よ」

「けれど私には」

彼女はそう言つて顔を背けた。

「そうした人はいないです」

「好きな人はいないの？」

「はい」

そして答えた。

「そうした人は。今までおりませんでした」

「じゃあ作ればいいわ」

「作ればですか」

「そうよ」

潤子は言つた。

「作ればいいのよ、これから」

「けれど今は」

「あのね」

引つ込もうとする女中に対してさらに言つた。

「どんな状況でも好きな人は作ることはできるわ。私だつてそうだし」

「お嬢様が」

「そうよ。今私は胸を患つてるわね」

「はい」

「患つてからかなり経つわね。本当ならもう死んでいてもおかしくないわ」

潤子が胸を患つてからもう何年も経つていた。普通なら病状はより進行している筈だった。死んでいてもおかしくない頃であった。だが彼女はそれ程病は進行してはおらず血を吐かないことも多い。

医者もそれが不思議だと言つていたものである。

「けれどね。今も何とか生きているわね、ここで」

「はい」

「それはどうしてだと思つて？」

「忠行様がおられるからですか」

「そうよ」

そしてこう言った。

「だから私は今まで生きてこられたの。そして」

言葉を続けた。

「これからも。だからね」

再び女中に顔を向けた。

「貴女も。誰かを好きになればいいわ」

「はあ」

そうは言われてもすぐにはできない。頷くしかなかった。

部屋を後にした。しかしまだよくわからなかった。今の彼女にとつてはこれからどうなるかだけで不安であつた。誰かを好きになることなぞできそうにもなかった。潤子は無理を言っているとさえ思えた。

（お嬢様はどうしてあのようなことを）

そう思っていた。思いながら歩いていった。歩きながら考えてはいたが答えなぞ出る筈もない。不安な心に今度は戸惑いの色が混ざつただけであつた。それが複雑に絡みあつたまま時間がまた過ぎた。

やがて日本は正式に降伏し、そして連合軍が日本にやって来た。

俗に言う進駐軍である。

街には甘いものに餓えていた子供達がアメリカ軍に甘いものをねだる光景がよく見られるようになった。その隣には日本人の女達がいた。かつて兵士だつた男達はそれを見て悪態をついた。

「強い者が結局いいのかよ」

「それでも日本の女か。大和撫子か」

しかし女中はそれを批判する気にはなれなかった。彼女は女であるせいとそのアメリカ軍の側にいる女達の気持ちが少ないがわかる気がしたのである。

彼女達の多くはこの戦争で父や夫、そして兄弟を亡くしている。全てを失ったのである。そしてそんな女が生きていくにはどうすれば。答えは一つしかなかった。彼女も生きなくてはならないのだ。その為にどれだけ罵られようと。何もなければそうして生きていくしかないのもまた現実であった。

「好きな人がいなくなつたからさ」

ある日道の端で酔つてそう喚んでいるそつした女を見た。

「聞いてる？あたしはねえ、戦争で亭主をなくしたんだよ」

それまでは普通の家庭の人だつたのだろう。そして優しい妻だつたのだろう。だが今はそんな時があつたようにはとても思えない程であつた。派手な格好を作つて安い酒を飲んでいる。酔えるだけが取り得の安い酒だ。運が悪ければ少し飲んだだけで死んでしまう。とんでもない酒であつた。だがそれでも飲まずにはいられない時もあるのだろう。

「それでね、今こうやつているのさ。そのどこが悪いんだよ」

「あんた飲み過ぎだよ」

仲間の女達がそれを窺める。その仲間達も彼女と同じような格好をしている。彼女達もまた同じ様な境遇であるう。失つてしまったのだ。女中はそれを黙つて見ていた。

「いいんだよ、どれだけ飲んでも」

彼女は地面に倒れこんでそう言つた。

「あたしなんていなくなつても誰も悲しまないから」

「悲しまない」

女中はその言葉がやけに耳に残つた。

「だからね、どうなつてもいいんだよ」

それを聞いていてふと潤子が言つた言葉が思い出した。好きな人がいればやつていけるといつた意味のあの言葉を。その時ようやく理解したような気分になつた。

その足で屋敷に向かつた。まだ暑い道をである。その年は例年になく暑く感じられた。まだ朝だというのに昼のように暑かつた。服

の上からジリジリときた。

屋敷に着き奥に向かう。ふと話し声がしているのがわかった。

「誰かしら」

男の声であった。しかも若い。

「あの声は」

聞き覚えのある声だった。彼女もよく知っている。潤子の声も聞こえる明るいものであった。その明るい声を聞いて確信を持った。「いらっしやい」

潤子は部屋に来た彼女に笑顔を向けた。その隣に彼がいた。

「戻って来られたのよ」

「左様ですか」

それを聞いて彼女も笑みを作った。

「よくぞお帰り下さいました」

「はい」

忠行はそれに頷いて応えた。

「色々ありましたか」

「はい」

女中はそれに頷いた。

「それでも。よくぞ戻られました」

「有り難うございます」

忠行はうつすらと笑っていた。だが何処か力のない笑みであった。

「御国はこうなってしまうましたが。それでも帰って参りました」

「忠行様」

そう言う忠行に対して潤子が声をかけてきた。

「何でしょうか」

「確かに負けてしまいました。それで終わりではないと思いますよ」

「どうしてでしょうか。この戦いで皇国は多くの者を失いました」

女中はそれを聞いて先程の女のことを思い出した。彼女は全てを失ってしまったのだ。

「はい」

潤子はそれに頷いた。

「それでこれからどうすればいいのか。貴女がおられますが」

「だから忠行様はこちらに戻られたのですね」

「ええ」

「ではそれでいいと思います。そして私のところに帰られたことに
対して心から御礼を申し上げます」

「御礼を」

忠行はそう言われてかえって戸惑いを覚えた。

「はい。以前御国と私が大事だと仰っていましたので」

「ええ、それは覚えていますよ」

「だからこそ戻って来られたのだと思います。それが心より嬉しい
のです」

「そうだったのですか」

それを聞いて心が救われる気がした。

「これからも私の側にいて下さいますか」

「残念ですがそうもばかりはいられません」

「どうして」

「私は医者ですから。貴女の他にも救わなければならない方々が
います。それに」

「それに？」

「貴女の胸を治す薬を。今それを集めているのですね」

「私の胸をですか」

それを聞いて大いに驚いた。

「けれど私の胸は」

「治ります」

忠行は優しい声でそう言った。

「必ず。そうした薬ができたのです」

「本当ですか？」

「はい。ですから」

彼は言った。

「御安心下さい」

「わかりました」

二人は抱き合った。病の床にあるが彼等の心は今繋がっていた。女中はそれを見て優しい笑みを浮かべた。そして彼女も決めた。誰かを好きになろう、と。

それから数年経った。舞鶴は今度は警察予備隊という組織の街になろうとしていた。

「あなた」

夫を呼ぶ妻の声が出た。

「お仕事に行かれるのね」

「ああ」

若い男が日に焼けた顔を見せた。爽やかな顔をした逞しい男であった。

「今日も稼いでくるからな。楽しみに待っていてくれ」

「ええ、わかったわ」

妻はそれに頷いた。そして夫を送り出したのであった。

見ればあの女中であつた。彼女はあれから街で知り合った復員兵と知り合い恋に落ちたのであつた。そして今はこうして家庭を持っている。小さい一軒家に家族と一緒に住んでいる。つつましかだが幸福な生活を送っていた。

「お母さん」

家の奥から彼女を呼ぶ幼い声が出た。

「何？」

声のした方に振り向く。見れば小さな女の子がいた。

「今日お屋敷の方に行くの？」

「ええ」

彼女は優しい頬笑みを娘に向けて答えた。

「そうよ。楽しみにしててね」

支え

「奥様お元気かしら」

「とても元気よ」

娘にそう言った。

「とてもね。だから楽しみにしてて」

「うん」

「昔はね、奥様も大変だったのよ」

「そうだったんだ」

「胸のご病気でね。けれど今は治ったのよ」

「胸が苦しかったの？」

「そうよ。とてもね。けれど治ったの」

「お薬で？」

「いいえ」

しかし彼女はそれには首を横に振った。

「好きな人のおかげで」

「旦那様のおかげなの？」

「そうなのよ」

娘に対して答えた。

「貴女もね、大きくなればわかるわ」

「何が？」

「好きな人がいることの大切さよ。それを知りなさい」

「よくわからないけれど」

娘は首を傾げながら言う。女中はその仕草がまたたまらなくいとおしかった。今では娘も彼女にとって大切なものであったからだ。

「わかった。わたし大きくなったら誰かを好きになる」

「そう、それがいいわ。じゃあ行きましょう」

「うん」

娘を連れて屋敷に向かった。懐かしい屋敷に。

舞鶴の夏はその日も暑かった。だが二人はその中をつきつきとした気持ちで歩いていくのであった。

支え

2
0
5
・
8
・
5

支え
完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3446a/>

支え

2008年8月29日18時05分発行